



随想

椰子の実はどこから流れて来たのか

東京外国語大学教授 中嶋 嶺雄

筆者略歴

- 中嶋 嶺雄（なかじま・みねお）
- 一九三六年 長野県松本市に生まれる。
- 一九六〇年 東京外国語大学中国科卒業。
- 一九六五年 東京大学大学院国際関係論課程卒業。
- 現在 東京外国語大学教授（国際関係論・現代中国学・アジア地域研究）
社会学博士（東京大学）。

この間、外務省特別研究員（在香港）、オーストラリア国立大、パリ政治学院各客員教授などを歴任。現在、日本国際政治学会理事、アジア政経学会常務理事、文部省重点領域研究「東アジア比較研究」総括代表などを兼任。

主な著書

- 「現代中国論」（青木書店）、「中ソ対立と現代」（中央公論社）、「中国」（中央公論社）、「北京烈烈」（ハントリー学芸賞受賞）（筑摩書房）、「文明の再鑄造を目ざす中国」（筑摩書房）、「新冷戦の時代」（TBSブリタニカ）、「香港 移りゆく都市国家」（時事通信社）、「知識人と論壇」（東洋経済新報社）など。

趣味 ヴァイオリン、絵画、登山。

（ヴァイオリンは松本音楽院第一期生として鈴木鎮一氏に師事し、昨年は霊南坂教会の敷地の一部も使って落成したサントリー・ホールのオーブニングの日に音楽愛好者の代表として独奏した。）

名も知らぬ遠き島より

流れ寄る椰子の実ひとつ

故郷の岸を離れて

汝はそも波に幾月

「実」の歌は、日本人なら誰ひとり知らぬ者が

ないほど広く親しまれている。愛知県渥美半

島の先端・伊良湖岬は、藤村が詠んだ椰子の

実が流れついた場所としても知られていて、

そこには記念碑まで建てている。「椰子の実」

信州の文豪・島崎藤村の詞による「椰子の

が全国に広まったのは、昭和十一年に当時の

NHKラジオが東海林太郎の歌で「国民歌謡」として放送して以来であることも、古い世代の人びとならご記憶のことだろう。

私のような戦後派もこの歌は大好きで、いかに近代日本的なメロディーが美しく、外国で生活をしてきたときのパーティーなどで何か日本の歌を唱わねばならなくなったときなど、私は妻との拙ないデュエットでよく「椰子の実」を披露した。

これほどポピュラーな曲ではあるが、ではこの美しいメロディーの作曲者は誰なのか。それが東京・赤坂の靈南坂教会で六十年間もオルガンを弾いていた亡き大中寅二師であることは、ほとんど知られていないのではないか。

その大中氏が逝って五年目の去る六月二十八日の日曜の夜、「晩禱」と題するささやかな追悼コンサートが靈南坂教会で開かれた。「バツハは聖トーマス教会（現在は東ドイツ）で生涯オルガニストを務めた。自分もこの靈南坂教会で生涯オルガニストを務めたい」と語っていたという大中氏は、大正九年に同教会に聖歌隊指揮者として着任して以来オルガンを弾きつづけ、昭和五十四年三月に同教会でオルガンを演奏中に脳内出血で倒れた。

このときも「譜が見えない」といいながら最後までその一曲を弾き続けたという。倒れて三年後に八十五歳で逝ったのだが、生前、大中氏の誕生日（六月二十九日）に近い日曜の夜、「晩禱」と名づけた礼拝がおこなわれ、二千曲もの新曲が披露されつづけてきたことにちなんで、今回の追悼コンサートが催されたのであった。

新築成った靈南坂教会は、かなりモダンな雰囲気であるが、当夜は、大中氏をしのぶ人々が多数つめかけて、礼拝堂をほぼ埋めつくしていた。先の聖トーマス教会でも演奏されたという「クリスマス組曲」などが愛弟子の今井奈緒子さんのパイプオルガンで奏せられ、最後は会場の全員で「椰子の実」を歌った。この間、三十歳も若い未亡人・香代さんの夫を語る言葉や元同教会牧師の飯清氏の「大中先生の想い出」、高塚牧師の説教などいずれも味わい深く印象的で、故人がああ「椰子の実」の美しいメロディーとはうらはらに頑固一徹で、自作の曲以外は弾かないという生涯を貫ぬき通し、また何かにつけてつねに周囲を手こずらせるなど、なかなか難かしい性格の持ち主であることも、大中氏を愛しむがゆえの率直な告白から明らかにされた。

いずれにせよ、当夜は、初夏の東京の一夜としてはこのうえない一齣であった。

そこで藤村の詞に戻るのだが、「遠き島より流れ寄る椰子の実」は、てはいったいどこから流れて来たのだろうか。私がこの歌を口ずさむたびに子供の頃から抱いてきた疑問でもある。この椰子の実は黒潮に乗って流れてきたのだから、沖繩か奄美大島からかもしれない。あるいはもっと遠く台湾かフィリピンからかもしれない。もしもそれが東南アジアから流れついた椰子の実であるなら、「海水到るところに華僑あり」とか「一本の椰子の木の下には三人の華僑がいる」といった言葉があることと何らかの関係があるかもしれない。香港や台湾を含むアジアの華僑社会では、椰子の実は果実、果汁、油、繊維、殻などひとつの椰子の実際のどこをとっても彼らの日常生活に欠かせない存在となっており、また椰子の実際のジュース（椰子汁）をベースにした燕の巣のスープなどは、中国料理の名品の一つでもある。

私は、こうしていつの間にか、「遠き島より流れくる椰子の実」を東南アジアの華僑社会と結びつけて考えるようになっていた。それは、私自身が中国社会を研究対象の一つ

にしていることからくる強引な解釈なのだが、それはそれでよいのではないかと思ってしまう。

要は、ひとつの椰子の実がそうであるように、日本といわゆる南洋社会には、海を介して様々な交流があったことを確認すべきことである。中国の文化も玄海灘や日本海を越えて直接中国大陸から流入したものの以外に、華南から東南アジア社会へと流れ、それが台湾や沖繩を経て伝わってきたものが多いはずである。

日本語のなかにも北京官話（標準中国語）とはなく、広東語や福建語（同じく閩南語つまり台湾語）と比べた方が発音が近似している言葉がきわめて多い。日本語も椰子の実のように華南から東南アジア、そして台湾、沖繩と伝わってきた部分かなりあるのではなからうか。

この問題を言語学者のあいだで専門的に論じだすと、どうも私の仮説は弱いようであるが、かつて私が右のような率直な印象を、わが国の民族学界の世界的な大先輩で、また私の母校・松本深志高校の大先輩でもあり、松中自治の歴史に残る本荘校長排斥事件の首謀者の一人でもあった亡き岡正雄博士（東大外

アジア・アフリカ言語文化研究所長も務めた)にお話したところ、「日本人の起源」の一つにパプア・ニューギニアがあるとの自説を終生抱きつづけておられた岡先生は、「君、それは正しいよ。民族学の立場から言えば、君のような仮説も成り立つんだ」と語られたことがあった。

私は現在、東アジアの社会的・経済的發展が著しいことに関連して、「儒教文化圏」を中心とした近代化・工業化の比較研究を試みる

学際的な大型共同研究を組織しているが、(文部省科学研究費重点領域研究「東アジア比較研究」)、この場合にも「儒教文化圏」という枠組を大陸中国や朝鮮半島のみに限定するのではなく、香港、台湾、シンガポールさらには東南アジアの華僑社会やベトナムにまで広げて見てみようと考えている。椰子の実
はひょっとするとベトナムの海辺から流れて来たのかもしれないからである。

美
芽

No. 96

1987. 8





若い芽 No.96

1987. 8. 10

もくじ

随想

題字 平林舟鶴
表紙絵 飛矢崎和彦
カット 須沢重雄
さし絵 須沢重雄

椰子の実はどこから流れて来たのか……………中嶋 嶺雄 2

乳幼児の生活

これからの家庭教育は……………田中 正人 6

小学生の生活

「青い目の人形」は語る……………荒井 治 9

中学生の生活

中学生の生活……………城倉 徳子 12

郷土の話

川を渡るみこし……………小坂 幸夫 15

グラフ

学園点描……………東部中学校 18

座談会

いじめと自殺について…………… 20

学年だより

「学年通信」より……………洪谷 修平 26

親の声

親の望み……………大住 裕子 27

同人独語

戦争おもちゃの国……………唐澤 正國 28

童話

ヨウスケとタイチ……………溝上 淳一 29

読者らん・編集室から